

研究ノート

神谷美恵子の長島愛生園における実践からの一考察

——神谷美恵子の診療録から見えるもの——

田 中 真 美*

はじめに

本稿の目的は、長島愛生園¹において神谷美恵子²の記録した診療録を用い、神谷の精神科医師としての具体的な実践がテキストに如何に書かれているかを明らかにすることである。神谷美恵子は、東京女子医学専門学校2年の1943年8月に長島愛生園で12日間の医学実習を経験し、その14年後の1957年から1958年にかけての2年間のうち50日間を長島に滞在し、精神医学調査を実施した。その調査を行い園では精神科医療がほとんど行われていないことに驚愕した神谷は、当時、長島愛生園園長であった高島重孝³に精神科医療について進言した。それがきっかけとなり、長島愛生園の初の精神科常勤医師として神谷の取り組みが始まった。1958年には、島に住み込みの宮内医師⁴が赴任したことにより、神谷は島の医療から離れた。しかし、10か月後、1959年7月、宮内医師の退職により、再び、精神科医師の不在になった島に通い始め、1972年4月30日付で退職するまで勤務を続けた。

神谷について、医師として、教育者として学者としての様々な側面は、『神谷美恵子著作集』に書かれている。精神医学的研究の業績は、『らいに関する精神医学的研究』『限界状況における人間の存在』『精神医学の歴史』『構造主義と精神医学』『ヴァージニアウルフの病跡研究』『人間学』『主婦の精神医学』など、その奥行は他の追随を許さない。神谷の評伝も領域を超えた研究者がそれぞれの領域から取り組んで記している。しかし、長島愛生園での具体的な実践の検証は置き去りにされたままの状況で、その実態も明らかにされないまま、刊行された文章だけを引用して批判や賛美の対象になっていた。それは、神谷が長島で精神科医師として何を行ったのかについては神谷の著作に断片的に出てくる以外には具体的に知られていないことにも起因すると考えられる⁵。

神谷の著書にはハンセン病患者についての記述はあるものの、プライバシーに対する配慮もあり、具体的に記していない。その実践の実際を知るために、神谷の著作の丁寧な読解、神谷の当時を知る複数の人へのインタビュー調査、神谷書庫の資料調査を行った。そして、長島愛生園での調査により、2012年現在、長島愛生園の診療録保管庫には、開園以来の全入所者の診療録⁶が保管され、1960年代に神谷が診察を行い記録した診療録も保管されていることがわかり、閲覧することができた。

そこで本論文では、今まで目にふれることのなかった一次資料である神谷の記録した診療録から神谷の実践を明らかにする。神谷のテキスト、高橋医師⁷の証言をもとに長島愛生園の精神科医としての神谷が1957年から1958年にかけて行った精神医学調査から10年経過した1968年に実際往診した一人の入所者に対して神谷がどう考え、どのように実践したのかを具体的に示す。そのうえで如何にテキストに表現されているかについて論考する。

1. 研究方法

神谷の著書には個人の病状や症例など特定できる情報がなく、その実践の実際を知るために、神谷の著作の丁寧

キーワード：神谷美恵子、長島愛生園、ハンセン病、精神科医療

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

な読解、神谷の当時を知る複数の人へのインタビュー調査、神谷書庫の資料調査を行った。その結果、長島愛生園での調査により、2012年現在、長島愛生園の診療録保管庫には、開園以来の全入所者の診療録が保管され、1960年代に神谷が診察を行い記録した診療録も保管されていることがわかり、診療録閲覧の申し出をした。研究にあたっては、診療録を扱うため患者の権利を尊重し、関係者にも十分配慮することが必要である。患者の診療録は、死後は法的に保護対象とならないとされているのであるが、園はいかなる場合も氏名、出身地などは開示しない方針であったが、死亡後5年以上経過した入所者に限り、氏名等の個人を特定できる項目を除き、神谷の記載がある期間に限って複写で閲覧することが許可された。長島愛生園側から求められたことは、神谷が診療を行った人を著作集から探し出すことだった。そこで、筆者は、『人間を見つめて』の「島日記から」に記載されたイニシャルから入所者の姓名を特定し、長島愛生園に保管されている診療録に到達できるのではないかと考えた。診療録の名前を絞りこむ作業の中でてがかりになったのは、1971年出版の『人間を見つめて』（1971年初版）の1974年の改訂版に掲載された「島日記から」の中にある神谷が精神科医として関わった入所者31人のイニシャルだった。このように神谷の著作には、長島愛生園で関わった入所者のことが記されている箇所がある。イニシャルから姓名を特定するには、死亡日時等の情報も必要であったが、「島日記から」には死亡日時の記載はなかった。そこで「島日記から」以外のものから調査を開始した。

「島日記から」以外の「島の精神医療について」の中に「往診」をしたと記載している箇所があることがわかり、往診した青年が詩を創る人であり、その詩人の名前は小泉雅二であったことがわかった⁸。しかし、その文章では神谷が往診したと書いていたが日時については明記されていなかったため、小泉の書いた詩を手掛かりに神谷書庫に保管されていた蔵書の中から小泉の詩集を探ることが出来、その詩集から死亡日時が特定できた。死亡日時が特定できたことにより、筆者は姓名を園側に報告した。それによって、園側による診療録の抽出、診療録への神谷の記載状況の調査が6か月を費やして行われ、「島日記から」のイニシャルに該当する入所者の診療録の一部が開示された。それらの診療録が「島日記から」の記載に合致することであることを高橋医師に確認してもらった。

尚、倫理的配慮として本研究は、立命館における「人を対象とする研究倫理」を厳守した。立命館における「人を対象とする研究倫理審査委員会」において、2012年10月5日承認された。（承認番号 衣笠一人—2012—10）

第2節では、1967年（昭和42年）から1969年（昭和44年）にかけて、神谷と高橋が診療を行った一人の男性小泉の診療録をひく。第3節では、小泉の診療録を発掘するきっかけとなった神谷のテキストを元に示す。そのことにより、神谷が長島に送った未公開の葉書が保管されていたことがわかった。それらをふまえ、第4節では、診療録からみえる神谷の実践について考察する。

2. 診療録

本節では、神谷と高橋が診察して記録した小泉の診療録を引用し、その経緯を示す。

1) 実際に記録されたことからみえる事実

1967年（昭和42年7月7日）に高橋が訪問し診療録には、以下の文章が記録されている。

「7/7 現在 このやりきれない気持ちをたたきつけた作品を先日投稿したとあって、詩の下書きをみせてくれる。気持ちを何にたたきつけたらよいのか。考えた末、神にたたきつけたという。」⁹

診療録や高橋医師の説明からわかる小泉の病状は、熱瘤（ねつこぶ）と痛みのために睡眠障害が起り、失明への不安が高まったということである。そのことにより、小泉への精神科医師の往診を依頼され、高橋が訪問した。詩の創作についての発言が多く詩の創作活動を行っていたが、病状が悪化し、自力での詩の記述が不可能になり、他人の代筆に頼っていた。その後、代筆者の不在のときに、詩を記録するために録音機が準備された。病気の進行により、手の病状の悪化に伴い、使用していた録音機が使いにくくなった。それに伴い、不安の気持ちや焦りの気持ちが高まり、同じ入所者の青い鳥楽団の人の活動や明石海人の話を例にだし、目が見えなくなる不安を高橋に訴

えていることが診療録の記録に遺されている。眼科の塩沼英之助医師にすがりつく思いで治療を頼んだことも高橋に伝えているが、すでに小泉の目の病状は手の施しようのないほどに悪化していた。

1967年（昭和42年）11月9日に失明に近づくことが高橋の文字で記録されている。

失明した翌年1968年6月6日、高橋が久しぶりに往診している。その日の小泉の状況について失明について安定はしてきたものの、精神的にはイライラしていることが高橋の診療録に記録されている。

そして、神谷が往診している記録に続く。

1968年（昭和43年）9月6日診療録神谷記載

「9/6 昨年11月に失明した。いらいらして壁に突き当たっている。41年7月に腹膜炎をやった。その時もかりかりした。舎¹⁰の籍がある。五センター¹¹に入ることになっている。詩や手紙を書いてもらう人の事で苦労している。録音機でやっているが困難している（手も悪い為）。五センターへ入ってからの生活についても不安である。他人が軽蔑しているような気がする→Beziehungsidee¹²になりがち。一時、舎に帰ったが、生活がムリになって、また、戻った。」

1968年（昭和43年）9月20日診療録神谷記載

「9/20 ものを書く事のイミを考えてしまう。しかし、自分は書く事に生きるしるしを感じてきたので今更それを捨てられない。腹立つと眠れない。暫らく寝ていない。暫く強いMittel¹³を出して後に減らすか変える。」

この日の島日記には、「9月20日 高橋先生の都合悪く、今週も急に昨日から来た。」（神谷：1980:232）と高橋の代わりに来園した描写となっている。

続いて10月4日に往診した高橋医師にも焦りや苦しみを伝える記録となっている。

1968年（昭和43年）10月18日診療録神谷記載

「10/18 自分の考えている事が書きたい。それが思うように代筆してもらえない事がつらい。自分には、詩を書くことしかできないのにそれができない。毎日がむなしい。録音機の問題」

この日の神谷の記録には「録音機の問題」と記され、その下には強く太い線がひかれている。

1969年（昭和44年）3月14日診療録神谷記載

「3/14 再び二病棟¹⁴に入室。chronische Nephritis（慢性腎炎）。psychisch（精神的）には元気で昨年10月退室以来の話をする。録音機操作を1Mかかってマスターし、詩を10編創作した。盲目についての詩はほとんど世にないから、それを自分は書きたい。詩集もだしたい。舎では、Schlafstörung（一）病棟では（+）¹⁵。一日も早く第五不自由センターに入りたいと。」

1969年（昭和44年）3月28日診療録神谷記載

「3/28 五病棟¹⁶の個室に入りたいと云いだした。自分の病気はもう治らないから、一人しずかに放っておいてほしいという。やけっぱちになっている。自分はこのままでいい。一人で好きな事をして死にたいと。入室しているとうるさくて何もできない、etc.

chr. Nephritis（慢性腎炎）で全身にOedem（浮腫）。Lepra（らい）の状態も悪い。その上、psychogen（心理的に）と思われるDiarrhoe（下痢）、Bauchschmerz（腹痛）等Klage（訴え）多し。五病棟では医療・看護が不十分である旨話す。」

そして、高橋、神谷以外の、当日死亡を確認した医師の文字で死亡時刻が記録されている。

「昭和44年4月15日 Am10時46分死亡」

神谷が最後に往診した日である3月28日から18日後の1969年(昭和44年)4月15日午前10時46分、慢性腎炎、尿毒症のため、小泉は息をひきとる。

診療録の3月28日の記録により、「島日記から」の3月28日—29日に登場するK・Mが小泉雅二であることが証明された。

「3月28日—29日 K・M氏からもすてばちのことばを沢山きかされた。わたしに何ができるか、とまたしても思う。これはもう精神科の領域ではない。」(神谷1980b:234)

小泉の生きがいであった詩の創作が出来ない壮絶な限界状況に対して、この日の神谷の日記の描写からは、なすすべもなく、立ち尽くす神谷の姿が伺える。

高橋医師は小泉との診察の場面で神谷と語り合ったことを回想する。

「生きるか死ぬか、そして失明、ぎりぎりのところで何とか、自分の遺したいものは遺したいという、神谷先生も私も小泉さんと話していると頭が痛いとか、そういう訴えではなしに、極限で、それでも生きていく価値を見出すことに命をかけている人との対話ですね」

診療録により小泉が1969年4月15日死亡した事実が確認できた。小泉雅二と神谷美恵子が診察で出会ったことが診療録の詳しい記録に残っているのは、1968年9月6日、9月20日、10月18日、1969年3月14日、3月28日の5回である。出会った回数は限られていたにも関わらず、神谷の著作の文章には終末期を迎えた小泉の往診のことがたびたび登場する。

3. 小泉雅二と神谷美恵子

1969年、小泉の死後、それまで勤務していた高橋幸彦医師が退職し、精神科医師が一人になり神谷は通い続ける。

「いずれにせよ、限界状況的なものに直面したときの人間の心情には、普遍的なものがあると思う。ただ、それを乗り越えるための手がかりとなる言葉は、決して出来合いのものでよいはずではなく、その時々、相手によってふさわしいものを探り求めなくてはならない。いく人かの患者さんに関して、これを探り求めるという課題を、いつも島から背負って帰ってくる。そして次に島に行くまでの間、何かにつけて考え続ける。そのためだろうか、いつも島から帰ってくるとしばらくの間は、普通の日常生活にすら対応できないような感じがつきまとう。つまり、家庭とか職業とか、健康とか能力とか、そうしたもののもろさ、はかなさが感じられてならないのだ。その結果のひとつだろうが、自分が道化であろうがなにであろうがかまわないではないかと思うようになった。人は、何かにつまづいて、初めてその所在を知る。わたしの仕事は、そんなものに過ぎなくてもいいではないか。高橋先生は、もう昨年限りでこれなくなったし、ともかくどなたか代わってくださるまで、体力の続く限りほそぼそと「島の仕事」を続けよう。こういう覚悟が昨今かたまってきた。これもしごとが人を作り変えた例の一つなのだろう。」(神谷:1981:34)

体力の続く限り仕事を続ける決意をした神谷であったが、体調不良の理由から1972年4月で退職した。しかし長島詩話会の詩人たちや盲人会の人を初めとする入所者との文通などの交流は、1979年、神谷がこの世を去るときまで続き、神谷の心は永遠に島と繋がり、神谷自身を支えていた。

神谷は、長島愛生園の盲人会や青い鳥楽団との交流については著作集にも書いており、また、評伝などにも書かれている。しかし、小泉も所属し活動していた長島詩話会については、ほとんど知られることがなかった。神谷書

庫に保管されていた長島詩話会関連の資料の中に神谷から送られてきた現金書留の封筒などが見つかり、1972年に退職した後も神谷は長島詩話会に現金書留で資金の寄付援助をするなどの交流をしたことがわかった。長島詩話会刊行の文芸作品は、小泉と出逢う前から読んでおり、1966年に刊行の「生きがいについて」の中にもハンセン病者の文芸作品を多く引用している。1969年、長島詩話会の『裸形』という詩集は、小泉が亡くなってから小泉の特集が企画され、出版された。それを読んだ神谷が長島詩話会宛に送った葉書が長島愛生園に保管されている。その葉書には丁寧につづられた神谷の文字があった。

1969年9月6日消印の葉書「また小泉さんにお目にかかれてうれしく存じました。なくなってから「人間小泉」にふれる思いです。私たち医師の限界を思い知らされました。わけても人間（患者さん）を知る上での限界を。どうか、みなさま、おげんきで。御礼まで。」

小泉雅二の死後には、また詩集の編纂が進んでいることを知り、仕上がりを待ち望んでいる様子が伺える。

1969年11月12日消印の葉書「看護婦さんたちが多く参加しているのはうれしいことです。彼女たちの多くは学院での私の教え子でもあり、いろいろな相談にあずかることもあるので、こうした形で自己表現する道が開かれているのは、彼女たちのためにありがたいことに思います。どうかよろしく。小泉さんの詩集、待っています。御礼まで。」

こうして神谷が心まちにしていた小泉の詩集は、『人間を見つめて』にも引用された。

小泉の死後、1971年4月刊行された小泉雅二詩集を受け取った神谷は、長島愛生園の雑誌『愛生』に書評を投稿し、1972年1月号に掲載された。その中に『人間を見つめて』の著書に詩集の引用の願いとその目的を記している。

「小泉さんの詩集をお送りくださってありがとう。やっとできて本当に嬉しく存じます。ちょっと病臥して発熱している間に詩集を拝読、今更のようにありし日の小泉さんの苦悩をまざまざと教えられました。このように自分をみつめ、表現できたことは、そのことだけで大したことだと思います。さいごの入室—その前もでしたが—のとき、何度か往診を頼まれ、わたしには何も言えなかったことを思い出します。何をわたしに期待しておられたのだろうかと苦しい自問をしたことも思い出します。わたしには到底わかりえない苦しみの深さをこの詩集は教えてくれます。わたしたちにわかるとは、夢にもいえないはずですが、これから先、臨床の場面で出会う患者さんがたの心に少しでも近づくことをこの本が助けてくれると信じます。大切に繰り返し拝見しましょう。」（愛生1972:28）

神谷が書いた1971年に刊行された『人間を見つめて』の「島の精神医療について」の中に「往診」をしたと記載している箇所があり、その文章にこの「代筆」の詩を引用していた。その詩が診療録を探し出すきっかけとなった。それは、1971年4月10日に300部の限定で出版された『小泉雅二詩集』の中に掲載されている。神谷が引用した「代筆」の詩の全文は以下である。

「十年以前（まえ）には 十人の代筆をしました
五年以前には 五人の代筆をしました
三年以前には 三人の代筆をしました

らいは、なおる時代になりました。

らい院ではお医者さまがいらなくなりました。

社会復帰者は、数をまし、日本のらい政策は終わりました
だから、国立らい院に眼科医もおりません。

眼科のお医者さまは、二週間に一度、らい院にやってきて
一日百五十人の患者を診察しておられます。

らい政策の終わったらい院で
ぼくは、だんだん光を失っております。」(小泉 1971:155)

この詩が掲載されている詩集の小泉の経歴を辿ると、小泉は、1948年入園し、1951年ごろから、園内作業にも参加し、気象観測所、印刷部、図書部、自治会書記などの仕事をこなし、詩にもあるように、盲人の代筆もしていた。神谷が小泉の「代筆」の詩の後半部分を引用して『人間を見つめて』に書いた文章は以下である。

「一例だけ、すでに故人になった若い人の詩を次にかかげておこう。日本のらいは終わった、と安易に考える人があるならば、この人の詩集を読んで、今なお存在するらいの苦悩を感じ取ってほしい。そして一人でも多くの医師がらいの分野にきてくださるようにと願う。

らいは、なおる時代になりました。
らい院ではお医者さまがいなくなりました。
社会復帰者は、数をまし、日本のらい政策は終わりました
だから、国立らい院に眼科医もおりません。
眼科のお医者さまは、二週間に一度、らい院にやってきて
一日百五十人の患者を診察しておられます。
らい政策の終わったらい院で
ぼくは、だんだん光を失っております。

この青年は、数々のすぐれた詩を残して昨年逝ったが、らいで失明し、「入室」していた晩年の彼に何度か「往診」をたのまれたことがある。眼科医でもなくらいの専門医でもないものに彼は何を期待していたのだろうか。おぎなりの慰めの言葉など何の役にも立たないことはあまりにも明白であった。」(神谷 1980b: 153)

このように神谷の著作にも引用した詩のことは、神谷の診療録によると、1969年3月14日、「録音機操作を1Mかかってマスターし、詩を10編創作した」と書かれている。その詩集が長島愛生園の神谷書庫編集部に保管されている著書の調査により発見することができた。それは島田ひとし発行の『らい』誌の14号(1969年3月号)に掲載されていた。その『らい』誌14号の中に小泉雅二のらい盲編の詩として七編(1, 鏡と痛みについて2, 失明3, 汚れは他人のもの4, 生きていること5, 嘘つき6, 笑う7, めくら犬)が掲載されていた。小泉は、終末期を迎えた限界的な状況の中においても盲目についての詩を書きたいと望んでいた。神谷の準備した録音機によって詩作が可能となり、それが小泉の最後の生きる証になったのではないかと推察する。

知覚を失ったらい者が次に恐れるのは失明である。明石海人も失明で苦しみながら詩を詠んだが、高橋の往診のときの診療録には、小泉は明石海人の詩にも言及していることが記録されている。明石海人は1939年に亡くなり、1960年代、小泉雅二の生きた時代の長島愛生園は変わっていたかもしれない。けれども、失明の苦しみは、時代を超えて、個人に襲いかかる。神谷の準備した録音機から生まれた詩のひとつ『失明』である。

「眼圧六十六の痛みが
鉄筋コンクリートに額をぶつけさせて
ぼくの大切な眼球を打ち砕いてしまった

眼から ひとすじ
赤い血が頬をつたい流れていました

国立療養所の
眼科診察室には
お医者さまが不在で
らい菌培養に成功の知らせが
どこか遠い国の出来事のように伝えられておりました」(小泉 1971:94)

本稿に記載した小泉の症状は、前述した突然の“らい”の宣告から徐々に状態が悪くなり、死に至る経過を辿った。病気の“宣告”という限界、“隔離”という限界、“失明”という限界と次々とその限界状況が変容してゆくのである。神谷の葉書にあるように、患者の限界に対して医師としての限界を知り、その中で立ちつくす神谷にとっても厳しい状況であったのではないかと推察する。

1947年にプロミンが日本に入り、ハンセン病は治る病気と言われるようになった¹⁷。そして菌もなくなった時代と言われた1960年代は、ハンセン病患者が多く社会復帰していく時代である。そのような時代においても、療養所では、小泉雅二のように失明の恐怖、終末期を迎え死の恐怖と闘いながら死に至る入所者もいたことがわかった。このことは、神谷の著作を初め、遺された文芸作品が伝えている。

高橋の証言にもあるように小泉の状況は、録音機の操作もできなくなり、体中の痛みもまし、慢性腎炎による全身浮腫があり、下痢と腹痛の状況の中での限界状況だった。小泉は、そのような状況においても一人で好きなことをして死にたいというすてばちな発言を繰り返していた。神谷は、こうした状況に対応することはすでに精神科の領域を超えているとも記している。

「いったい私は彼の苦悩に対して何をなしうるか。今、彼に必要なのは、精神医学よりも宗教や哲学や思想といった領域のものではなかったろうか。」(神谷 1977:164)

神谷は、著作の中で小泉の詩を引用したり、小泉との出逢いや精神科医師としての実践を通じて自己の限界と対峙したことを記している。その他にも小泉雅二詩集が刊行されてから2年後の1973年2月号『信徒の友』に掲載された「患者さんと死と」の文章は、1977年8月に『神谷美恵子・エッセイ集Ⅱ——いのち・らい・精神医療』の中に編集され出版されている。その中に小泉と思われる詩人のことが掲載されている。

4. 考察

詩人として長島詩話会に属し創作活動をしていた小泉と生前からの交流があり、「小泉雅二詩集」の発行にも携わった鳥田等は、神谷の実践をそばでみていた入所者の一人でもあった。鳥田は、神谷が精神科医師として関わるようになった時期をらいの医療の第三段階と位置づけた。鳥田のいう第三の段階について注目したという神谷のことを長島詩話会発行のらい誌21号(1973年9月号)の中で述べている。

「日本のらい患者はいま何を病んでいるのだろうか。プロミンなど化学療法剤の開発は、らいの非伝染性化(菌陰性化)に見通しをつけた。またリハビリテーション医学の適用は、一般にらいによる後遺症といわれている身体障害への対策(防止と回復)を体系化させる方向に開いている。しかし、それでも患者は病んでいる。少なくとも患者の多くは病んでいる思いから解放されていない。このような事情に対して精神科医としての方法論に個人的な資質を加えて、早くから注目された一人は、神谷氏であった。」(鳥田 1973:11)

このように記した鳥田等は、神谷の退職後も文通などの交流をしており、1979年10月22日死去した神谷に対し

て詩を創った。その詩「先生に捧ぐ」は、神谷の告別式で加賀田一¹⁸により朗読された。

共に仕事をした高橋医師は、

「同じ人間として、なぜこの人たちだけがらいに苦しまねばならないのか、病者の苦しみに共感すればするほど、先生の呻吟はより激しくなっていくようであった。先生は、すぐれた学者であるが決して書齋の人ではなく、実践の人でもあった。」

と語った。

神谷自身も『人間を見つめて』にも実存的なカテゴリーの問題について精神科医師としての限界を感じたことを書いている。

「要するに、否応なしに、患者さんの心の問題は、こちらにおしよせてくる。そこで対面させられるのは、病苦、失明、疎外、生死の問題など、いわゆる実存的なカテゴリーのものが多。こうしたことからだろう。私は精神医学、とくに自然科学としての精神医学の限界を痛感するようになった。いつでもこうした問題に圧倒されつづけてきた。」(神谷:1980:154)

神谷の書いた『生きがいについて』が一般的に知られている著書の一つであり、長島愛生園のハンセン病者のことも記されている。その『生きがいについて』が神谷の実践と理論の結実したものと論考する研究がある(eg. 輪倉[2003]、釘宮[2010])。実はそうではない。診療録に書かれていた入所者との出逢いは1968年から1969年であり、『生きがいについて』が出版されたあとである。

本稿で扱った1969年小泉との出会いにおいて、神谷は、限界状況に対して医師としての限界を感じながら、自己との厳しい対峙をしている。神谷の問いは、1966年の『生きがいについて』の著書の中での問いでもあった。

「らい病にかかっているひとたちをみても、なぜ私たちではなく、彼らが病まねばならないのか、という問いが出てくる」(神谷1980:97)

1966年『生きがいについて』を出版した後も長島に通う中で、神谷はこの「問い」が解かれぬまま、問い続けたのである。そして神谷の思いは、1971年出版の『人間を見つめて』の「万霊山にて」においても次のように述べられる。

「縁あって時と所を同じうして生まれ合わせた者は、共に生き、共に苦しみ、共に何らかの歴史を形づくった後、再び永遠の次元にかえていくのだ。人生は「永遠」と「時間」の交差点であり、人間が歴史に参加できるのは、この点にも似た短い時間にすぎない。与えられたこの短い生をどう生かすか、生かせるか。それを見なければその卒塔婆のうしろの扉をあけて、たくさん並んでいる小さな骨壺をながめればよい。困難の中で堂々と使命に生きた人や苦悩の中で雄々しい生涯をいきぬいた人の名前が、そこにいくつも記されている。」(神谷:1980:251)

1960年代は社会復帰の方がふえていく時代でもあったが、本稿で扱った診療録の小泉のように失明し、亡くなっていき、骨になっても故郷に帰っていくことのできなかつた人々は万霊山に眠っている。限界状況の壮絶な苦しみの病者との時間を共有して神谷が「受け取ったもの」を記した神谷の論考である。

おわりに

本稿では、長島愛生園に保管されていた神谷が記した小泉雅二の診療録を元にして、神谷の精神科医師としての

実践の実際を検証した。

1972年4月、体調を崩し長島愛生園を退職した神谷が入退院を繰り返す中で、1974年、『人間を見つめて』の改訂版に「島日記から」を入れた。その島日記には、神谷の精神科医師として診察する日常の様子が描写されており、この「島日記から」が本稿でも記した診療録を探し出すきっかけとなったのである。

本稿では、今迄明らかにされないまま、批判や賛美の対象になっていた長島愛生園の実践について、診療録を用い確認した。それにより、神谷のテキストの背後には、神谷の実践があつて書かれたものであることがわかった。

今回の神谷の記した診療録の発掘により、神谷の具体的な実践の一部が明らかになった。今後も神谷の具体的な実践について調査し、明らかにしていきたいと考えている。診療録についての検証は、今後の課題とする。

注

- 1 長島愛生園 国立としては、初のハンセン病施設として1930年（昭和5年）11月20日に開園。岡山県瀬戸内市邑久町虫明の所在であるが、当時は瀬戸内海の離島であった。1931年（昭和6年）全生病院（東京）と途中収容者を合わせて85名が最初の入所者となった。2013年6月末現在、入所者255名。
- 2 神谷美恵子 1914年～1979年、長島愛生園の精神科医師。
1982年（昭和57年）に刊行された長島愛生園入園者50年史『隔絶の里程』が出版されてから16年後の長島愛生園自治会史『曙の潮風』の中にも精神科の欄に神谷の取り組みが記されている。
「愛生園の精神科医療は、神谷美恵子医師が初めて手をつけた。1958年（昭和33年）「一連の精神医学調査を行ってみたときには、内因性精神病の人たちに対してさえ、ほとんど何の医療も行われていなかった。」（神谷美恵子「長島愛生園の精神科医療について」）状態であった。1960年（昭和35年）8月、厚生省は、らい療養所の精神病棟の整備計画を立て100床をブロック別にわけ、愛生園には30床が瀬戸内三園（注10）の共同利用として配分された。1967年（昭和42年）3月、精神病棟は第五病棟として近代的な装いをもとに開設されることになった。らい療養所の中で、精神病患者が医療の対象として扱われるようになるには長い年月を要したのである。」（長島愛生園入園者自治会1998:148）
- 3 高島重孝 1907～1985 長島愛生園の2代目園長として光田園長の後任の仕事を引き継いだ。在任期間は、1957年～1978年。（光田園長1876～1964 長島愛生園の初代園長、1943年、神谷美恵子の医学実習のときの園長でもある。在任期間は、1931年～1957年）
- 4 宮内医師 長島愛生園の専任精神科医師として1958年6月から勤務した。10カ月勤務したのちに退職し、長島愛生園を去る。
- 5 1965年の『レブラ』34巻第4号に掲載された高橋の論文「らい患者の心理」の「はじめに」の箇所に「我が国においては、1947年山村の東北新生園における報告および愛生園においては神谷、竹内の各報告があり、とくに神谷は精神障害者の実態、更にロールシャッハ・テストを初め各種の心理テストによる心理調査の結果をも報告している。これらの報告を結核患者の心理的調査と比較すれば、らい患者の心理面に関する報告は少い。」（高橋1965:349）と記されている。
1957年から1958年にかけて神谷が行った精神医学調査は公表されており、それ以降は神谷は研究発表や学会報告などをしていない。1965年、高橋幸彦は長島愛生園の症例を元にして、上記論文を公表した。
- 6 1958年9月26日に赴任してきた宮内医師から精神科の診療録の記録が始まったと神谷の著書の中に記されている。10カ月後、宮内医師が退職し、神谷は1959年7月から再び、島の精神科医師の仕事を開業する。そして神谷は、その時期から診療録を記載することになった。1962年から高橋幸彦医師が非常勤で通うようになり、神谷と交代での勤務となり、高橋も診療録を記録するようになった。勤務を始めたころのことをふりかえり高橋が診療録について、記している。
「それまで先生一人によって整然と記載されてきたカルテに、わたしが侵入することになる。客観的な症状は勿論のこと、病者の内面的世界を生き生きと伝える彫りの深い緻密な先生のカルテは誰もまねることができない。」（神谷著作集月報（9）：1982:1）
- 7 高橋幸彦 1935～神谷美恵子が長島に通った当時に同時期に通った精神科医師。勤務した期間は、1962年～1969年。
高橋幸彦医師へのインタビューは、2012年12月13日午後4時～午後6時、2013年1月10日午後4時半～午後6時、茨木病院会議室にて研究についての同意書を記入のうえ行った。
- 8 詩人としてペンネームで活動していた。長島愛生園の入園者名簿から、本名が別に存在することが確認でき、本論文で小泉雅二の氏名を使用する了解が得られた。
- 9 「神にたたきつけた」と書いた診療録を高橋幸彦医師が回想した所、小泉が言った言葉「この世には、神も仏も存在しない」という怨みの言葉を多く発したときに、神に向かってたたきつけたという意味だった。
- 10 舎 入所者の居住に当てられた建物を一般に「舎」と呼び、一般舎、夫婦舎などがある。
- 11 五センター 不自由者棟（介護棟）の一つ。障害度が比較的低い入所者の介護棟「五不自由センター」は、五センターのより詳しい第五不自由者棟とか第五不自由者センターの方が園内文書でも使われた名称。

- 12 Beziehungsidee 関係念慮（周囲の出来事と自分を関係付けて考える）
- 13 Mittel 薬
- 14 二病棟 一般病棟の一つ、時期により内科系または外科系の病棟として使用。
- 15 Schlafstörung 睡眠障害、(-)は、睡眠障害がなかった。(+)は、睡眠障害があった。
- 16 五病棟 精神科病棟の古い名称。
- 17 小泉の診療録を皮膚科（ハンセン病）専門医師に確認したところ、小泉が“難治らい”であったことがわかった。小泉の死去した1969年は、長島では難治らいのことが問題になっていた。
1970年に刊行された創立記念40周年記念誌には「1967年（昭和42年）4月、京都における第41回らい学会で『難治らいに対する諸問題』の表題でシンポジウムがもたれた。この問題は、各療養所とも重大な関心を寄せるところであり、翌年の第42回日本らい学会においても引き続きシンポジウムがもたれ、長島愛生園からも参加した。当時らい腫型患者66名が難治らいの症例として報告された。1969年（昭和44年）患者数1359名に対して24.9%にあたる339名が菌陽性を示していた。またL型患者1016名のうち菌陽性は33.4%に相当することになる。」と書かれている。
- 18 加賀田一 1917～2012,1936年に長島愛生園に入園。その後、神谷美恵子の通っている当時の自治会長、その他、全患協の中央委員などもしていた。

引用文献

- 神谷美恵子（1966）『生きがいについて』みすず書房（1980）
神谷美恵子（1971）『人間を見つめて』みすず書房（1980）
神谷美恵子（1973）『極限の人』ルガール社
神谷美恵子（1977）『神谷美恵子エッセイ集1－教育・人物編』ルガール社
神谷美恵子（1977）『神谷美恵子エッセイ集2－いのち・来・精神医療』ルガール社
神谷美恵子（2004）『遍歴』みすず書房（初版1980年）
釘宮明美（2010）『神谷美恵子の宗教思想：『生きがいについて』の射程（第四部会、＜特集＞第68回学術大会紀要）
小泉雅二（1971）『小泉雅二詩集』現代詩工房
中井久夫（2005）「解説」神谷美恵子『本、そして、人』314, 328
長島愛生園入園者50年史（1982）『隔絶の里程』日本文教出版
長島愛生園自治会史（1998）『曙の潮風』日本文教出版
島田等（1969）『らい誌14号』長島詩話会
島田等（1973）『らい誌21号』長島詩話会
高島重孝（1972）『愛生一月号』長島愛生園慰安会
輪倉一広（2001）「自立と共生の展開（1）－神谷美恵子の思想形成を例として－」『後藤学園研究紀要第3号』

A Study of Mieko Kamiya's Vocation as a Psychiatrist at the National Sanatorium Nagashima-Aiseien Sanatorium for Hansen's Disease: Unpublished Medical Charts and Other Writings by Kamiya

TANAKA Mami

Abstract:

This paper traces the life history of Mieko Kamiya, a psychiatrist who worked at National Sanatorium for Hansen's Disease (also known as Nagashima Aiseien), and examines the significance of her clinical practices. While many studies have analyzed her writings and her relation to the national policy to segregate patients of Hansen's disease, none of them have focused on the aspect of Kamiya as a psychiatrist. Based on content analysis of her writings, documents owned by Nagashima Aiseien, and unpublished medical records written by Kamiya between 1968 and 1969, this paper reveals how her clinical practices went beyond the scope of medical treatment. She encouraged one of her patients to compose poems by offering him a tape recorder as he became blind and weak due to Hansen's disease. She realized the limitations of working as a doctor, and instead sought for what she could do as a human being. This paper illustrates how Kamiya went beyond the scope of medical treatment as she tried to be close to her patients' needs and desires.

Keywords: Mieko Kamiya, National Sanatorium Nagashima-Aiseien, Hansen's disease, psychiatric care

神谷美恵子の長島愛生園における実践からの一考察 ——神谷美恵子の診療録から見えるもの——

田 中 真 美

要旨：

本論文の目的は、精神科医としてハンセン病患者に向き合ったことで知られる神谷美恵子が、長島愛生園（国立ハンセン病療養所）で行った臨床実践を明らかにしてその意義を検証することである。

神谷に関しては、その数多い著作の分析や、ハンセン病の隔離政策との関係を扱った研究があるが、精神科医師としての側面に焦点を当てた研究は存在しない。本研究は、①著作の内容、②愛生園所蔵の資料の総合的検討、③1968～1969年にかけて神谷が記した未公開の診療録を用いて、神谷が医療の枠をこえて行った実践を明らかにした。ハンセン病のために失明し、障害が進む状況の患者のために、神谷は、死ぬまで詩を創ることができるように、録音機を提供した。神谷は医者としての限界を感じ、人として患者になにができるのかを探そうとした。それぞれの望みや願いに寄り添う神谷の実践には、医療の枠を超えた臨床実践としての意義が認められた。

